

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：37407

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510359

研究課題名(和文)高齢者を介護する中高年単身者の支援プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of Support Program for Middle-aged Single People Caring for the Elderly

研究代表者

生野 繁子 (SHONO, SHIGEKO)

九州看護福祉大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：40249694

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：「在宅で高齢者を介護する中高年単身者」326事例の分析から、6割を占める息子・娘は、介護を「自分しかいない」「子としての責任」と受け止め、自分自身の将来展望に不安を持ちつつ継続していた。支援上の苦慮も男性に対しては家事能力・仕事との両立・介護技術、女性に対しては高齢者との関係・仕事との両立・他の家族との関係の順であり性差が見られた。男性は介護や地域でのネットワーク不足・情報不足・他者に頼れず一人で背負う傾向が明らかであり、「ワンストップ型カフェ」における支援の有効性が示唆された。

育児と同様に介護についても、すべての人が誰かをケアしている時代であることを前提にした制度設計と支援が望まれる。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed 326 cases of middle-aged single people looking after the elderly at home. 60% of them were sons/daughters, who perceived the care <to be done by nobody else but themselves> or <as responsibility of children> and continued it with feeling insecure over their own future. The analysis also revealed gender differences in the difficulties requiring support: <homemaking skills>, <balance with work>, and <nursing skills> for men; whereas <relation with the elderly>, <balance with work>, and <relation with other family members> for women. Men showed particularly clear tendency of not being able to rely on others and shouldering the burden by themselves due to poor nursing/community networking and lack of information, which indicated a one-stop <café-like> service center may be effective in supporting them.

Just as childrearing, nursing care should have the institutional design and support based on the fact that we are in the era of <everybody caring for somebody>.

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：ジェンダー 中高年単身者 シングル介護 男性介護者 介護者支援 高齢者介護 介護離職 ワーク・ライフ・バランス

1. 研究開始当初の背景

平成 20 年の 65 歳以上の高齢者の世帯構成割合は高齢者二人暮らし 29.7%、高齢者単独世帯 22.0%、三世帯世帯 18.5%、未婚の子との世帯 18.4%であった。介護保険が導入された平成 12 年度と比較しても、三世帯世帯で暮らす高齢者割合は減少し、高齢者の家族構成や住まい方が多様化の一途を辿っている。

一方、在宅介護者の中の男性割合は、平成 19 年調査では 28.1%と 3 割弱まで増え、家族介護は男女共同参画が進みつつあることが示唆される。しかし、高齢者虐待防止法が施行された平成 18 年度以降も、家族による介護殺人や家庭内における高齢者虐待は増加し、平成 20 年度の家庭内の養護者による高齢者虐待件数は 14,889 件であり、その虐待者は 8 割以上が同居、高齢者との続柄は息子 40.2%、夫 17.3%が多く、その世帯は未婚の子と同一世帯が 35.6%であり、未婚の子が息子・娘別のデータではないが、虐待者の総数の 4 割が息子であることから、「未婚の子と同一世帯」の性別は男性が多いと推測される。

平成 11 年に男女共同参画社会基本法が施行され、制度の面や公的な場での男女平等の理念は理解されつつあると言えよう。しかし、現在の中高年は生育歴の中で性別役割分担意識に影響されているのが一般的である。すなわち、「男は外で仕事、女は家で家事・育児」という意識である。性別に関わらず介護と職業との両立は困難であることに加え、性別役割分担意識を払拭できない場合、男性中高年単身者の介護状況は、家事・介護のスキルに乏しく、他者に頼れない状況に陥りやすいこと、女性中高年単身者は介護のため自分自身の老後の準備も出来ず、貧困化することが指摘されている。実際に介護のための自殺や心中が相次いでいる。

我々による高齢者虐待の調査結果（生野 2006）では、家庭内高齢者虐待にみる家族類型は、独身で中高年の息子による虐待が一番多いことが明らかになった。しかも虐待者はアルコール依存に関わるトラブルを抱えていることが多いとの示唆も得た。同じく我々による介護支援専門員を対象とした成年後見制度促進に関する調査結果（野満・生野 2009）では、介護支援専門員自身が女性高齢者と独身中高年の息子の組み合わせへの支援や介入に困難感を持っているとの示唆を得ている。

高齢者虐待防止や虐待事例への介入は、地域包括支援センターがその役割を担うことが平成 18 年の介護保険法の改正により明記されている。しかし、家庭内での高齢者への虐待を発見は、地域包括支援センターの職員だけではなく、そのケアプラン作成や居宅支援事業をコーディネートする介護支援専門員が一番多い。また、次いで看護職や介護職となっている。

病院や施設の看護職を対象にした高齢者虐待の認知とジェンダー観の研究（松岡・生野 2009）から、看護職自身が従来の性別役割分業観に賛成としているの方が、高齢者虐待の行為を見過ごしていたり、やむを得ない行為として捉える傾向があることを明らかにした。看護職も患者や利用者のキーパーソンが中高年単身者（特に男性の場合に顕著）であることに対して、その介入のスキルを持っていない。同時に男性キーパーソンには介護や家事への期待は低く、反対に女性キーパーソンへの介護者役割期待が高いことが知られている。看護職を含む専門職自体が、男性介護者しかも中高年単身介護者への声かけやアプローチ方法を持ち合わせていないのである。

また、一般の中高年者を対象にした高齢者虐待の調査（竹熊・生野 2006）によるにおいても、夫婦間では男性も介護役割を担

う必要性に関する認識は進んできているものの、親世代の介護は女性の役割であると捉えている割合が高いとの示唆を得た。

男性の未婚率も生涯未婚率もかつてないほどに上昇しており、今後も40歳代・50歳代の未婚者は増加する予測が出ている。今後は、男女とも単身のまま中高年となり同居している高齢の親を介護する状況が増加していく。進展する高齢社会においては、介護者の性や年齢に関わらず、介護者のワーク・ライフ・バランスが良い状況に保たれ、要支援・要介護高齢者の尊厳・人権が守られることと両立することが望まれる。

以上から、未曾有の規模で増加する高齢者人口と、日本人の未婚率が急上昇する今、男女共同参画の視点をはっきりと意識した、中高年単身介護者への支援プログラムが必要である。

高齢者を介護する家族への支援の必要性は認識されているものの、性別に関わらずその介護者が未婚のまま、あるいは離別後の単身者である場合の支援や介入方法に関する研究は少ない。自分自身の将来や老後に対して将来像を描けないまま、高齢者と共に不安の中を過ごしている中高年単身介護者への有効な支援方法を確立することは、現在の高齢者介護のみならず、将来の高齢者介護のあり方も提言できる。

2. 研究の目的

在宅で高齢者を介護する中高年単身者への有効な支援と、ジェンダーとワーク・ライフ・バランスに考慮した介入方法を明らかにし、支援プログラムを開発する。そのために、看護職を基礎資格にもつ介護支援専門員の要介護高齢者を介護する中高年単身者への支援の現状を、全国の地域包括支援センターへの郵送調査により明らかにする。高齢者を介護する中高年単身者への支援でうまく行っている事例の聞き取りを行い、有効な支援を明らかにする。在

宅介護に関心のある市民と中高年単身者介護者のワンストップ型の介護講座を開催し、当事者からの意見を直接得る。この3点から総合的に支援プログラムを検討する。

3. 研究の方法

1) 郵送調査

対象: 全国の地域包括支援センターと訪問看護ステーションから協力が得られた看護職。

調査内容: データ収集方法: 全国の地域包括支援センター109ヶ所と訪問看護ステーション132ヶ所から協力を得て、中高年単身者が高齢者を在宅で介護する事例を収集。

2) インタビュー形式での聞き取り調査。

中高年単身介護者への支援で在宅での介護が継続している事例について

3) ワンストップ型の介護講座での支援。

4. 結果・考察

1) 郵送調査について

(1) 介護者が中高年単身の息子の場合:

全報告事例382名中、約半数の189名が中高年単身息子の介護事例であった。中高年単身息子の年齢は50歳代85名(45%)、60歳代56名(30%)、50歳未満29名(15%)で、その72%が未婚者、66%が有職者であった。介護対象の高齢者の年齢は、80代が6割、介護度は要支援1・2(40%)と、要介護3・4・5(40%)で8割を占めた。介護場所は持家での在宅介護が9割であった。

利用介護保険サービスでは複数回答で多い順に訪問系のサービス(128件)、住宅改修や福祉用具系のサービス(78件)、通所系サービス(86件)であった。ワーク・ライフ・バランスの状態は「職場の理解で継続(38名)」、「仕事を辞めた(37名)」であった。介護の受け止め方は複数回答で「子としての責任(118名)」、「自分しかいない(114名)」で、介護者自身の将来展望は「悩んでいることが分かる」、「介護者自身で解決できる」、「相談された」がそれぞれ3割であ

った。

(2)介護者が中高年単身の娘の場合:

全報告事例 382 名中、1/3 の 123 名が中高年単身娘の介護事例であった。中高年単身娘の年齢は 50 歳代 51 名 (41%)、50 歳未満 30 名 (24%)、60 歳代 27 名 (22%)、単身状況は未婚者 61%、離死別 27%、職業は有職者 48%、無職者 52% で半々であった。介護対象の高齢者の年齢は、80 代が 6 割、介護度は要支援 2 が 2 割、要介護 5 が 3 割弱で各介護度に分散していた。

利用介護保険サービスでは複数回答で多い順に訪問系のサービス (86 件)、住宅改修や福祉用具系のサービス (74 件)、通所系サービス (63 件) であった。ワーク・ライフ・バランスの状態は「仕事を辞めた (28 名)」、「職場の理解で継続 (21 名)」、「年休で対応 (13 名)」であった。介護の受け止め方は複数回答で「子としての責任 (91 名)」、「自分しかいない (87 名)」で、介護者自身の将来展望について半数以上から「相談され」ており、「自分で解決できる」は 2 割であった。

2)インタビュー形式での聞き取り調査。

5 施設の看護職にインタビューの機会を得て、支援している中高年単身者で、在宅介護が継続している事例について自由に話してもらった。有効な支援についても多くの示唆を得た。

(1)代表的な在宅介護継続事の中高年単身者事例の共通点

・介護以前からの親子関係がしっかりとしていること。・男性でも生活上の気配りができること。・持家があり、本人の収入と親の年金があること。・イベントや行事に関しては副介護者の支援があること。・本人の健康状態が良いこと。・農業などの自営の場合と職場の理解で職業と両立していること。

(2)有効な支援内容

・ホームヘルパーサービス、訪問看護などを組み合わせ 1 日に最低 1 回はいずれかの

サービスが入るように組み合わせている。

・月 1 回は 2 泊 3 日のショートステイを入れ、介護者のリフレッシュ機会を確保する。

・インフォーマルな支援も受けられるよう地域に働き掛ける。

・男性はリフレッシュも自己完結が多いため、自由な時間を定期的にとれるようなサービスの組み合わせを考える。

・女性は愚痴を言ったり話すことでリフレッシュできる場合も多く、話を良く聞く。

・性別や年齢に関わらず、相手の考えや希望に添って何が必要かを一緒に考える姿勢で支援する。

・介護者の健康状態の把握と支援も念頭に入れて関わる。

3)ワンストップ型の介護講座での支援。

(1)介護講座の概要

時間設定:土曜日午前 2 時間

会場:大学の介護実習室等 3 教室

前半 40 分の内容:セミナー趣旨説明・福祉便利グッズ説明・リーガルサポートの現状説明・介護のコツの説明

後半 80 分の内容:ブースに自由参加する方式。看護師担当の介護技術コーナー(プロジェクトで制作した短編 DVD 使用)、福祉機器業者担当の介護用品コーナー(最新の機器)、司法書士相談コーナー(財産管理・成年後見制度などの個別相談)、看護師・保健師担当のカフェコーナー(簡単調理体験・血圧測定)、スタッフ 14 名で実施。

(2)ワンストップ型の介護講座の評価

参加者属性:男性 8 名、女性 13 名、年齢 20 代 1 名、30 代 1 名、50 代 3 名、60 代 7 名、70 代 7 名、80 代 1 名、不明 1 名。現在介護中 9 名(父を介護 2 名、母を介護 7 名)、単身者 6 名。

セミナー内容の評価:「勉強になった」、「役に立った」、「楽しかった」が多く、特に介護用品と調理体験や試食コーナー(カフェ)はほぼ全員が体験し「役に立った」と

していた。司法書士相談コーナーで6名相談、「悩みが解決できた」と回答した。

介護についてのニーズ

シングル介護の現状、認知症進行に伴う接し方、国の方針(介護保険料)に関する情報の相談が多かった。

介護者支援のニーズ

サービス資源情報提供、介護者への身体的精神的健康支援、福祉用具情報提供、介護者会情報(参考になる成功・失敗例等)とネットワーク(特に認知症介護)、24時間介護体制支援拡大であった。

介護上の困りごと(将来予測含む)

多い順に「自分自身の健康」、「介護技術や方法」、「食事の準備(料理)」であった。

自由記述からは体験型セミナーの楽しさやDVDや最新の福祉介護機器が参考になったこと、司法書士相談の機会提供への評価があり、また、介護継続には自分自身の健康の大切さと介護技術や方法は健常者でも十分に使える便利なものが多いということを実感したことが伺えた。

(4) ワンストップ型介護講座支援の考察

単身中高年介護者支援に関する研究を進める中で、実際の単身者に限らず介護者支援ニーズを検証するために多職種協働で開催したセミナーであった。男性介護者事例が多かった我々の先行研究と同様に今回も男性が1/3以上を占めていた。将来の介護に備えるための参加者が多く、地域に応じた具体的な情報提供ニーズが示唆された。在宅での介護継続に必要な情報をひとつの場所で提供し、講義形式ではなくカフェ型の受講者同士の語らいや介護技術・福祉機器使用・調理体験は良い評価であった。支援ニーズが一番多いのは介護者自身の健康状態についてであり、介護者というインフォーマルな人的資源に頼っている在宅介護の現状を反映したものと推測された。

このような形態の支援プログラムの開発

が必要である。

4. 研究成果

1)「在宅で高齢者を介護する中高年単身者」326事例の分析から、6割を占める息子・娘は、介護を「自分しかいない」「子としての責任」と受け止め、自分自身の将来展望に不安を持ちつつ継続していた。支援上の苦慮も男性に対しては家事能力・仕事との両立・介護技術、女性に対しては高齢者との関係・仕事との両立・他の家族との関係の順であり性差が見られた。男性は介護や地域でのネットワーク不足・情報不足・他者に頼れず一人で背負う傾向があった。

2)インタビューや将来の介護に備えるための参加者が多かった、ワンストップ型介護講座の評価を通して、地域に応じた具体的な情報提供ニーズが示唆された。在宅での介護継続に必要な情報をひとつの場所で提供し、講義形式ではなくカフェ型の受講者同士の語らいや介護技術・福祉機器使用・調理体験が支援プログラムに必要である。

以上から、「ワンストップ型カフェ」における支援の有効性が示唆されたと考える。育児と同様に介護についても、すべての人が誰かをケアしている時代であることを前提にした制度設計と支援が望まれる。

5. 主な発表論文等

1) [学会発表](計9件)

吉岡久美、生野繁子、正野逸子、戸田岳志、白川恵子、松岡聖美、鷹居樹八子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、Support to Middle-Aged Singes Caring the Elderly in Visit Nursing Center、The 10th East Asian Congress of Health Promotion、p115-117、2012年10月26日、korea、Pyeongtaek.

生野繁子、吉岡久美、正野逸子、戸田岳志、白川恵子、松岡聖美、鷹居樹八子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、Support to Middle-Aged Singes Caring the Elderly Comprehensive Regional Support Center

The 10th East Asian Congress of Health Promotion, p118-120、2012年10月26日、korea、Pyeongtaek.

中嶋恵美子、生野繁子、吉岡久美、正野逸子、戸田岳志、白川恵子、松岡聖美、鷹居樹八子、岡部由紀夫、高齢者を介護する中高年単身者の実態 地域包括支援センターと訪問看護ステーション調査より、第17回日本在宅ケア学会学術集会抄録集 p140、2013年3月8日、水戸市。

鷹居樹八子、正野逸子、生野繁子、吉岡久美、戸田岳志、松岡聖美、白川恵子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、高齢者を介護する中高年単身者の介護に関連する困りごと地域包括センターと訪問看護ステーションの調査(第2報)、第17回日本在宅ケア学会学術集会抄録集 p141、2013年3月8日、水戸市。

正野逸子、鷹居樹八子、生野繁子、吉岡久美、戸田岳志、松岡聖美、白川恵子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、高齢者を介護する中高年への介護介入の実態地域包括センターと訪問看護ステーションの調査(第3報)、第17回日本在宅ケア学会学術集会抄録集 p142、2013年3月8日、水戸市。

松岡聖美、生野繁子、吉岡久美、正野逸子、戸田岳志、白川恵子、鷹居樹八子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、看護職が抱く高齢者を介護する女性中高年単身者の支援における困難、第26回日本看護福祉学会学術大会抄録集 p82、2013年7月7日、久留米大学。

戸田岳志、生野繁子、吉岡久美、正野逸子、松岡聖美、白川恵子、鷹居樹八子、中嶋恵美子、岡部由紀夫、高齢者を介護する男性中高年単身者への支援～何が必要とされているのか～、第26回日本看護福祉学会学術大会抄録集 p83、2013年7月7日、久留米大学。

岡部由紀夫、生野繁子、吉岡久美、正野

逸子、戸田岳志、松岡聖美、白川恵子、鷹居樹八子、中嶋恵美子、看護職における中高年単身介護者の性別による支援方針の違いについて 訪問看護及び地域包括支援センター所属の看護職の比較、第26回日本看護福祉学会学術大会抄録集 p84、2013年7月7日、久留米大学。

Emiko Nakashima、Shigeko Shono、Kumi Yoshioka、Itsuko Shono、Elderly Home Care by Unmarried Middle and Older-aged Sons、第3回世界看護科学学会、2013年10月16日、韓国ソウル市。

2)〔その他 3件〕

ホームページ「シングル介護プロジェクト」<http://shingle-kaigo.com/>

新聞掲載西日本新聞社 平成26年3月27日朝刊タイトル「おひとり介護」

オリジナルDVD「ひとりで悩まない介護」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生野 繁子 (SHONO SHIGEKO)
九州看護福祉大学・教授
研究者番号：40249694

(2) 研究分担者

吉岡 久美 (YOSHIOKA KUMI)
九州看護福祉大学・専任講師
研究者番号：30412787

(3) 連携研究者

正野 逸子 (SHONO ITSUKO)
産業医科大学・教授
研究者番号：90584516

鷹居 樹八子 (TAKAI KIYAKO)
産業医科大学・教授
研究者番号：40325676

中嶋 恵美子 (NAKASHIMA EMIKO)
国際医療福祉大学・教授
研究者番号：30461536

白川 恵子 (SHIRAKAWA KEIKO)
九州看護福祉大学・助教
研究者番号：60566933

戸田 岳志 (TODA TAKESHI)
九州看護福祉大学・助教
研究者番号：10590896

松岡 聖美 (MATSUOKA KIYOMI)
九州看護福祉大学・助教
研究者番号：80566935